2022.03.12.
T.Kobayashi

ドストエフスキーとの出会いとその後
白痴に挑む日々

<1>　書架の整理に端を発して

新型コロナウイルスの蔓延により初めて外出自粛の期間を体験した年、積年の懸案事項である書架の整理に着手した。まず最初に新書版の本の中で損傷が激しいものを廃棄することにした。思いの外所蔵書籍の減少には至らなかったが、書架に縦横に詰め込まれていた書籍は整然と並ぶようになった。
次に着手したのは文庫本、これもまた崩壊が始まっているものや変色・損傷がうかがえるものは廃棄。
とは言っても、ひとつひとつの書籍の中にはそれぞれの時代の臭いが染みこんでいるものが少なくないので、片付けながら斜め読みをしてみたりで、なかなか思うようには捗らなかった。
ある朝、まだ痛んでいない表紙がついた二冊のセットを右手がつかんだ。
新潮文庫のドストエフスキー「白痴」上下。外見上はほぼ新品同様であったが、中を開いて見ると紙の変色が進行していて、神田の古本屋で味わったことがある「古書」の臭いが漂ってきた。「白痴（上）」の頭から10頁も進まぬ辺りに一枚の国鉄の乗車券がはさまっていた。
平成3年7月21日　近江長岡駅から東京都区内行の乗車券(6,700　円)。伊吹山へ行った時の帰路の乗車券だった。往路は夜行列車だったし、帰路も長旅なのでザックに突っ込んで旅立ちしたような記憶が蘇ってきた。
さして頁も進まず、その後も気乗りせず本棚に積んだままになっていたのだろうか。
パラパラとめくりながら拾い読みを試みたが、紙の変色も手伝って現在の視力では眼鏡をかけても読み切れないので諦めて再び本棚に戻した。
数日後、棚に戻した本を再び手にしているうちに妙案を思いついた。紙が変色していて読みにくいのなら、新品を買えば読めるかもしれない。それからしばらく書店の陳列棚を探る日々が続いた。
新潮文庫「白痴（上・下）」は現在でも存在していたが、我が家のものとフォントサイズが同じでやはり読みにくい。
紙質・フォントの問題もさることながら、翻訳された日本語が何とも読みにくかった。ツルゲーネフにしろトルストイにしろドストエフスキーにしても、ロシア文学の訳本は日本語の表現が重厚で難解な表現が多く取り付きにくい。
特にドストエフスキーの作品は、人物描写や状況の説明がしつこいほどに繊細で、一文字も落とさずに読み取らないと筋書きに付いていけないように感じる。
そんなこともあって何度か積ん読の憂き目に遭ったのかもしれない。
河出書房の文庫本に「白痴（上・中・下）」があることがわかり、書店で斜め読みしてみたら読むことが出来た。
フォントとそのサイズ、文字間隔、行間隔が新潮文庫より読みやすかったのと、訳者が異なり読みやすい日本語になっていたので、購入を決定。
新潮文庫版「白痴」の訳者は木村浩(1925 年～1992 年)、トルストイやドストエフスキーの作品を数多く翻訳しているロシア文学の翻訳の世界では第一人者。この本は 1971 年発売だった。
河出文庫版「白痴」の訳者は望月哲男（1951　年生）、木村浩とはひと時代異なるためか、日本語の文体には現代人にとって読みやすさを感じる。
かくして、新潮文庫二冊セットを廃棄する代わりに河出文庫三冊を購入することになり、所蔵の書籍数は増えることになった。
そして、その年の 9 月からこの本を読み始め、2022 年 3 月現在「（中）」を読み終わりそうなところまで来たので、今度は読了にたどり着けそうな気がしている。

<2>　カラマーゾフの兄弟

初めてドストエフスキー文学に触れたのは「カラマーゾフの兄弟」。
1968年の夏、神田の古本屋を物色中に見つけて買った。河出書房の1955年版「世界文学全集　11」で、米川正夫訳。弁当箱（どかべん）のサイズ（22.5cm×15cm　厚さ　3.7cm）、全頁三段組で小さな文字で614頁、今なら「読めない・読みにくい本」で絶対に買わないだろう。三段組なので寝床で読んだら一晩で一頁も読めない。

専ら通勤の途中の読書で、国立から東京迄一時間の通勤時間をたっぷり使い、興が乗れば歩きながらも読んだ。

> アレクセイ・カラマーゾフは、本郡の地主フョードル・パーブロヴィッチ・カラマーゾフの三番目の息子である。このフョードルは、今から13年前に奇怪な悲劇的な死を遂げたため、一時（いや、今でも町で時々噂が出る）なかなか有名な男であった。しかし、この事件は順序を追ってあとで話すこととして、今は単にこの「地主」が（この地方では彼のことをこう呼んでいた。そのくせ、一生涯ほとんど自分の領地暮らしたことはないのだ）、かなりちょいちょい見受けることもあるけれど、随分風変わりなタイプの人間である、というだけにとどめておこう。つまり、ただやくざで放埒なばかりでなく、それと同時にわけのわからないタイプの人間なのである。

冒頭の記述は何やらミステリー小説を思わせるような内容で、「この先何が起きるのだろう」と強い関心を抱かせるものだった。

そして、この後にフョードル・パーブロヴィッチ・カラマーゾフのプロフィールとともに、彼を取り巻く人々の存在を明らかにしていく。

ロシア人の長い名前をきちんと覚えるのは大変なことなので、読みながら見開きの白紙部分に登場人物名を鉛筆書きでメモし、それぞれの人物の関係を系図にして見た。

後に「罪と罰」を読み、「白痴」を読むに至り分かったことだが、ドストエフスキーは作品の中で、登場人物の人物像を克明に紹介して読者に対して明らかにいくことで、その先で起きる出来事への影響力を感じさせるという手法をとっている。

ファーストネームからサードネームまであるロシア人の長ったらしい名前を頭に入れるのは至難の業であるが、作者は作品の中でそこにも気を使っている。ロシア人の名前は、ファーストネームは自分の名で、セカンドネームは父親の名、サードネームは苗字を表わしているということを説明しながらカラマーゾフ家の人物を紹介しているので、名前と関係を覚える苦労は解消した。

筋書きの流れに従って新しい登場人物があると、その都度同じように丁寧に人物像を明らかにしてくれるので、文章の長さには辟易としはするものの、わかりやすさと興味の湧出という点ではありがたい。

そして何ヶ月かかかって無事読み終えることができた。

三人の息子を持つ父親であるフョードル・パーブロヴィッチ・カラマーゾフが殺された。親子・兄弟とその関係者の複雑に絡まり合う人間関係の中で、犯人捜しの謎解きのような展開になる。それぞれの登場人物の人物像とフョードル・パーブロヴィッチ・カラマーゾフとの関係が様々な出来事を通じて示されながら進んで行く。

「この小説は映画にしたら面白いだろうな」と素人ながら感じた矢先、ハリウッド映画「カラマーゾフの兄弟」が登場した。リチャード・ブルックス監督でユル・ブリナー、マリア・シェル、リー・J・コブが出演なので、映画好きな者には見逃せない機会と飛びついた。

ドストエフスキーとの出会いは、こんな流れだった。

<3>　罪と罰

次に読んだのは「罪と罰」

1968年12月、新潮文庫の「罪と罰（上巻）」を購入。ということは、7月に買った「カラマーゾフの兄弟」は5ヶ月ほど要して読み終えたようだ。「罪と罰（下巻）」を買ったのは1969年3月、この作品も読むのに時間がかかった。

「カラマーゾフの兄弟」では、いきなり特定の登場人物のプロフィールを書き出したのだが、「罪と罰」では少々異なる始まりで、主人公である「一人の青年」がどんなところでどんな暮らしをしているのかについて語っている。

> 七月の初め、度外れに暑い時分の夕方ちかく、一人の青年が、借家人から又借りしているS横町の小部屋から通りへ出て、何となく思い切り悪そうにのろのろと、K橋の方へ足を向けた。
>
> 青年はうまく階段で主婦と出くわさないですんだ。彼の小部屋は高い五階家の屋根裏にあったて、住まいというよりむしろ戸棚に近かった。女中と賄い付きで彼にこの部屋を貸していた下宿の主婦は、一階下の別なアパートに住んでいたので、通りへ出ようと思うと、大抵いつも階段に向かって一杯あけっぱなしになっている主婦の台所わきを、いやでも通らなければならなかった。そしてその都度、青年はそばを通り過ぎながら、一種病的な臆病な気持ちを感じた。彼は自分でもその気持ちを恥じて、顔をしかめるのであった。下宿の借金がかさんでいたので、主婦と顔を会わすのが怖かったのである。

登場する一人の青年の様々な角度からの紹介が続く。そして三人称の存在のままで「彼」と彼を取り巻く人々のプロフィールが示されていくが、名は明かされない。
青年の名が「ラスコーリニコフ」であることがわかるのは 10 頁以上進んだ後になり、これに呼応するようにほかの登場人物の名も明らかにしていく。
主人公のフルネームが「ロジオン・ロマヌイッチ・ラスコーリニコフ」であることがわかるのは、さらに先の頁に進んでからのことだった。
登場人物の人物像と取り巻く人々の人物像を細かく印象づけて行くという点で、「カラマーゾフの兄弟」とも共通している手法を感じる。
貧しい青年ラスコーリニコフが金貸しの老婆を殺害する。殺人事件の犯人捜しになり、犯人がわかり、その経緯も明らかになっていく中で、主人公の人物像や生きてきた経緯を絡ませて様々な人物が登場する。そして、主人公の罪の意識、更正への道が語られていく。
この作品も、読み終えた頃にソヴィエト映画が公開されていたのですぐに見に行った。暗い画面と悩み深き国の悩み深き青年を描いた映画はずっしり重たく、疲れを感じる映画だった。
それから何年後かに、ソヴィエト映画の「カラマーゾフの兄弟」も見る機会があった。やはり、ロシア文学の映画はハリウッド映画では無理があるように感じた。
<4>　白痴
そして挫折を乗りこえて再び挑むことになった「白痴」は、毎晩寝床で眠る前のひとときの読書なので、なかなか捗らない。前夜の筋書きを翌日になると忘れてしまい、何頁か戻って読み直すこともあり、この先、無事読み終えることができるだろうか、と心配しながらのスタートになった。こんな書き出しで始まった。

> 十一月の末、寒さがゆるんだ日の朝九時頃のこと、ペテルブルグ・ワルシャワ鉄道の列車が全速力でサンクト・ペテルブルグに近づきつつあった。ひどく湿っぽくて靄がかかっているせいで、あたりはようやく明るんだばかり。線路の右手も左手も、十歩離れるともう何ひとつ車窓から見分けがたいほどだった。乗客には外国帰りも混じっていたが、格別混み合った三等車の座席を占めているのは、概して仕事で旅する普通の人々で、遠方からの客は少なかった。みなお定まりのように疲れ切って寝起きのどんよりとした目をしており、体は冷え切って、顔も靄と同じように血の気のない黄ばんだ色をしていた。

まるで映画の始まりのような描写に引き込まれる。

> 三等車の窓際の席に、夜が白む頃からずっと、二人の乗客が向かい合って座っていた。いずれもまだ若く、ほとんど手ぶらで、しゃれた身なりもしておらず、いずれもかなりの特異な容貌の持ち主で、おまけに、互いに相手と話を始めたがっていた。どうしてお互いが今とりわけ注目に値する存在なのか、この二人が理解し合ったならば、きっと奇しくも自分たちをこのペテルブルグ・ワルシャワ鉄道の三等車に向かい合わせに座らせた偶然の不思議さに、びっくりしたことだろう。

そして、一方の乗客の細かな人物描写が始まったのちに二人の会話が始まる。
そして 10 数頁ほど進んだところでようやく一方の男がレフ・ニコラエヴィチ・ムィシキン公爵という名前であることが読者にわかる。
幼い頃から重度のてんかん症状を持つムィシキン公爵はスイスで転地療養をしてきた。成人して快癒し、これまで彼を援助してくれたパブリーシチェフの死もあり、ロシアへ戻ることになった。ペテルブルグへ向かう列車の中でパルヒョン・ロゴージンという男と出会う。ペテルブルグ到着後、ロゴージンとその取り巻きの数多くの人々が絡まり合いながら様々な出来事に巻き込まれていく。両親がすでに他界して身寄りのないムィシキンは遠縁にあたるエバンチン将軍を頼って訪ねていくが、ここでもまた様々な人との出来事が絡んでくる。
ナスターシャ・フィリポヴナという不思議な女が登場し、エバンチン将軍の娘アグラーヤとともにムイシキンの恋心を動かす。ナスターシャ・フィリッポヴナを巡るムィシキンとロゴージンの葛藤、そこにアグラーヤが絡み・・・・。
さて、この後はどんな展開になるのか。（3 月10日現在ここまで）
本棚の整理に手を付け始めた頃、NHKのラジオ放送で「ドストエフスキー生誕200年」という特別番組をやっていた。番組の中で、彼がどんな世界をどう生きてきて、それがどんな作品にどう影響してきたのかなどの解説があった。そしてドストエフスキー作品の映画化に挑んだ黒澤明のことも紹介していた。

黒澤明の映画「白痴」は1951年に公開された。原作をベースにして、舞台を日本にした筋書きになっており、原作の冒頭に出てくる「ペテルブルグ・ワルシャワ鉄道」は「青函連絡船」になっており、「ムィシキン公爵」は森雅之が演じ「亀田欽司」となっているとのことだった。また、筋書きに大きな影響力を持つ「謎の女　ナスターシャ・フィリッポヴナ」は原節子が演じ「那須妙子」となっていると紹介していた。
時代背景・個々の登場人物の人物像・各シーンでの背景や風景の持つ意味などを詳細に組立て、絵コンテや撮影メモなどで克明に定義していく黒澤映画の手法は、どことなくドストエフスキーの作品と酷似しているように感じた。この映画はまだ観たことがないので、無事読み終えたらDVDを手に入れて鑑賞してみたいと思っている。

以上